

小説 竹内けん  
挿絵 A.S.ヘルメス

エロヲノベで得た知識で異世界ライフ

# 魔王転生

試し読み版

第一章	くっころの女勇者と高笑いする魔女
第二章	魔王の布告
第三章	やりまくり漫遊記
第四章	魔王VS魔王
第五章	光の勇者たち
第六章	バッドエンド

## エターナル

女勇者。典型的な『くっころ系』で、魔王となった星太を討伐すべき悪だと思っている。

## レーバテイン

伝説の女魔王。『炎の女帝』の二つ名の通り、豪快かつ絶対強者の雰囲気漂わせる女傑。

## マリィ

悪の魔女。星太を魔王として召喚した張本人であり、少々残念な思考を持つ爆乳お姉さん。

## 保坂星太

魔王として突如異世界に召喚されてしまった男子学生。好きなものはエロラノベと女騎士。

## アレキサンドライト

御年 200 歳の人外ロリ娘。『世界の調停者』を自称する、神出鬼没で道化的な謎の少女。

(たぶん、女にとつての包皮の皮剥きつて、男が女の処女膜を見る感覚に近いんだろうな)と漠然と考える。

(何度か自分で剥こうとしたことあるんだけど、滅茶苦茶痛いんだよな。でも、マリイに剥いてももらえるなら、嬉しいかも)

綺麗なお姉さんに包茎を剥いてもらう夢は、星太としても何度か見たことがあったのだ。自分で剥くよりも、そっちのほうが絶対に嬉しい。そう考えた星太は、痛みを覚悟して躊躇いながらも了承した。

「あ、ああ……やってくれ」

「ありがとうございます。では、さっそく剥かせていただきますわね」

嬉しそうに笑ったマリイは、両の肘で巨大な乳房を左右から押さえたまま、器用に両手を上げると、包皮の先端を親指と人差し指で左右から摘んだ。

「では、失礼して……はむ」

くいつと左右に開かれた包皮の穴に、濡れた赤い舌が下ろされた。そこから実と皮の間に舌を入れて、唾液を流し込みながら慎重に剥き上げていく。

(いて、いててて……ちんぼの皮を剥かれるの痛いけど。でも、綺麗なお姉さんに剥いてもらうのって、すげえ幸せ)

肉棒は爆乳に挟まれた状態で、先端の包皮が少しずつ剥き下ろされていく。

「レロレロレロレロ……」

唾液に濡れた赤い舌を駆使してマリイは、ついに包茎をすべて剥き上げてしまった。

「あはっ、一段と素敵なおちんぼさまになりましたわ」

満足げなマリイの声とともに、星太の脳裏には機械的な声が聞こえてくる。

『包茎の卒業を確認。おちんちんの耐久力アップのスキルを獲得しました』

なんだそりゃ、とツツコみたくなるが、そういう仕様のようだから仕方がない。

真っ赤に腫れあがった亀頭部の周りには真っ白な恥垢がこびりついている。しかし、マリイはその光景に嫌な顔をするどころか、嬉しそうな顔をして舌を伸ばし、丁寧に亀頭部を舐め清めていった。

(くー、すごすぎ……)

肉幹は柔らかい乳房で挟まれている状態で、初剥きされた亀頭部を舐め回されるのだ。

魔王の力。耐久力アップスキルなど関係ない。若き血潮が肉袋の奥から肉幹を通して一

気に駆け上がる。

ブルブルブル

激しく痙攣した逸物を慌てて乳房で押さえ込んだマリイは、亀頭部をパクリと口に含んだ。

(あ、マリイの中で出してしま……)

口内射精という行為はもちろん知っている。

綺麗なお姉さんに自分の精液を飲んでもらいたい、という願望はもちろんあった。

しかし、逸物の先端から出る液体である。まるでおしっこを飲ませるような罪悪感が心を占めた。

「マズイ」と思った星太は、反射的に溢れ出す精液を気合いで止める。

そのため逸物はさらに激しく痙攣した。しかし、そんな抵抗を粉碎しようとするかのようになり、マリイは口に含んだ亀頭部を吸引する。

「……チュー」

(あ、そんなことされたら……もう……ダメ)

亀頭部の先端にまで精液が詰まっていた逸物に、トドメを刺された。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！

マリイの口内で逸物は爆発していた。罪悪感に心を痛める星太とは裏腹に、マリイは頬をすぼめて吸っている。

まるで尿道をストローにして、睾丸から直接、精液を吸引されている気分だ。

「ジュルジュルジュル……」

星太の精液というよりも、精根を搾り取るかのようなであったマリイも、射精が終わったと悟ると、萎みゆく逸物を口から離してくれた。

「……あはっ♪」

満足げに頷いたマリイは、星太に顔を近づけると、軽く口を開いてみせた。口内が真っ白だ。

(うわ、俺の精液があんなに……)

絶句する星太の前で口を閉じたマリイは、舌でじっくりと味わったあとで顔を上げ、恍惚とした表情で喉を鳴らして嘔下<sup>えんげ</sup>していった。

(飲んでくれたんだ。俺の精液……)

なんとも言えない熱い思いが、心の中に高まってくる。

たかが口内射精。ザーメン飲み。二次元ドリーム文庫内では当たり前であり、何度も読んだ記述だ。しかし、実際にやってもらうと、予想以上に嬉しく、たまらない気分になった。

「ああ、これが魔王さまの精液……青臭いほどに濃厚で、ふう、とつても美味ですわ♪」  
マリイは頬つべたが落ちそうだと、言いたげに両手で自らの頬を押さえている。

その光景に星太の中になかが弾けた。いままで内心で、悪の魔女だ、ババアだと口汚く罵っていたのに、愛しい気持ちで胸が一杯になってしまったのだ。

「マリイ、今度は俺におまえのオマ○コを見せてくれ」

「あ、はい」

「おまえ俺の部下なんだろう。なら早く俺の顔を跨いで、オマ○コを見せろ！」

突如としてがつつきだした星太にいささか驚いたような表情を浮かべたマリイだが、命じられるがままに仰向けになっていた星太の顔に跨がった。

「これでよろしいですか？」

「ああ」

両手を伸ばし、臀部を左右から挿んだ星太は感動していた。

(うわ、尻もデカ!?)

乳房も大きい、尻もかい女である。腹部が括れているから、より大きく感じるのだろうか。ムッチムチである。

(こういうのをエロ尻っていうんだろうなあ。男に犯されるためにある体だ)

男を虜にする女王蜂の尻である。陰毛の手入れの行き届いているマリイの股間は、ぶつくりとした恥丘にフサリと筆のような陰毛が美しく整えられているだけで、あとはすべて綺麗に切り落とされている。肉裂の左右にも肛門にも、ムダ毛の一本も残っていない。それだけに隅々までよく見える。

「ああ、恥ずかしいですわ。臣下たる身で、魔王さまのお顔に跨がるだなんて……」

「ふっ、そのわりにはずいぶんと期待しているみたいじゃないか。トロットロの蜜が滴つてくるぞ」

「ああん、申し訳ありません。あたくし液量の多い体質みたいです……」

マリイは恥ずかしそうに告白したが、濡れやすい女を嫌いな男はいないだろう。

星太は左右の親指を、肉裂の狭間に入れて、左右にくばつと開いた。トロットロと溢れ出た熱い雫が、顔にかかる。

「ほお、これがマリイのおマ○コか」



「は、はい。魔王さまに捧げたオマ○コですわ。魔王さま専用の肉壺ですわ」  
羞恥に震えているようだが、マリイは逃げようとはしない。男に秘部を視姦される恥辱を楽しんでいるかのようだ。

(うわ、エロ。これが発情中の牝の生殖器か)

先程、女勇者エターナルを触手で捕らえて陰唇を無理やり開いて覗いたわけだが、当然ながら、あのとときの彼女はまったく性的に興奮していなかったから、美しくはあってもカラカラだった。

それに比べてマリイの陰唇は、失禁してしまったのかと思えるほどにトロトロに濡れている。美と表現するのは難しい。しかし、卑猥さが男を煽る。

パールピンクだったエターナルの秘肉に比べると、マリイの秘肉は赤味が強い。それにクリトリスがかなり大きい。包皮から飛び出していて、ちよつとびっくりする大粒だ。

(クリトリスってオナニーしすぎると大きくなるって聞いたことがあるな。マリイはさつきまで処女だったみたいだけど、間違いなくオナニー癖あるだろうからな。ホームクルスたちに奉仕させていたみたいだし……。そのせいでクリトリスがこんなに大きくなっちゃったんだ。ほんとエロいお姉さんだなあ)

我慢できなくなった星太は、美味しそうな女のもつとも貴重な旨肉に向かって、舌を伸ばし、そしてペロリと舐めた。

「あん♪」

喘ぎ声をあげたマリイは、腰をブルリと震わせる。

（ああ、これがオマ○コの味なんだ。美味♪）

味覚という単純な意味では、酸っぱくてしょっぱいだけのものだが、そんな言葉では表現しきれないうまみが、星太の口内に広がった。

感動した星太は、マリイのデカ尻を両手で捕まえて、その秘部の隅々に至るまで丁寧に舐め回した。

「ひい、ああ、ああん、魔王さまの舌は、とつても力強くて、ああ、素敵。とつても、とつても気持ちいいですわ〜♪」

マリイの喘ぎ声に注意しながら、膣穴や尿道口も舐める。膣穴にズボリと舌を入れて掻き混ぜてもみた。しかし、マリイがもつとも感じるのはクリトリスのようだ。

（うーん、マリイはクリトリス派ってことかな。いや、単にまだまだ開発されてないってだけかな。マリイが破瓜したのはほんのちよつと前の出来事だもんな……うーん、俺が開発してあげたい）

経験の浅い少年は、淫乱お姉さまを喜ばせようと試行錯誤した結果、とりあえず陰核に吸い付く。

「ひい——っ！ そ、そこは……そこをそんなにされたら、ああ♪」

あ、やっぱりクリトリスが弱点なのね。

マリイの急所を発見した星太は、包皮の剥けた陰核を口に含み、吸引しつつ、舌先で激



みせた。

それを見せつけられた瞬間、星太の脳裏はかーっと熱く燃えた。

「それじゃ、入れるぞ」

いきり立つ逸物を翳した星太は、マリイの白い右足を抱えあげ、左足を跨いで突撃する。  
ヂュポリ！

「あつ、大きい♪ 魔王さまのお大事が、あたくしのオマ○コの中に入ってくるう〜〜」

初めて自分から挿入したわけだが、狙い違わずに入れることができた。それは魔王の力とは関係なく、単なる偶然だ。

グニユニユニユニユ!!!

魔王の肉杭は、柔らかい隧道を押し開きながら、あつという間に根元まで入ってしまった。

コリ

亀頭部の先端に、固い筋のようなものがあつた。

「あ、奥に、届いた……」

目を剥いていたマリイは、高く翳した右足をわななかせる。

「どうやら星太の逸物は、マリイの最深部、すなわち、子宮口を捕らえたようだ。」

（子宮口に届くって、俺のおちんちんってやっぱり大きいのかな。いや、子宮口って女性

が感じていると下がってくるといふから、マリイが感じているだけで、俺のおちんちは関係ないのかな)

どちらなのかよくわからないが、とりあえず嬉しい。

喜び勇んだ星太は、マリイのむっちりとした右足を抱えたまま、荒々しく腰を使った。

ズゴズゴズゴ

「あつ、あつ、あつ、そんな、あ、あつ、あつ、奥まで、奥まで突かれるの、気持ちよすぎる。ああ」

側位で若い男に突きまくられたマリイは、世界征服を企む悪女とは思えぬ涙目になって喘いでいる。

(くっ、これは気持ちいい♪)

先程は、魔王として覚醒するために、マリイに強引に童貞を食われた。

それはもちろん、気持ちよかったわけだが、それ以上に気持ちいい。

(今度こそ、男になった、という気分だ)

牝として牝を犯す。その原始的な喜びを感じた星太は、夢中になって腰を激しく前後させた。

射精欲求はすぐに高まり、限界を感じたが、それを気合いで押しとどめる。

マリイに包皮を剥かれたせいで、亀頭部が敏感となり、襲い来る快感が何倍にもなっているようだ。





## 第四章 魔王VS魔王



いることを喜んだ星太は極上の乳房を揉みしだき、大粒の乳首をチューチューと吸った。「あつ、そんなに夢中で吸われると、ああ、ぼ、母乳は出ぬぞ、だが、ああ、よい、よいぞ」この快感、久しく忘れておった……」

乳房の大きな女は、感度が悪い、という俗説があるが、それは乳房の小さな女のやつかみというものだろう。大きかろうと小さかろうと、勃起した乳首は女にとって極めて敏感な性感帯だ。

「ああ、おっぱいが、おっぱいが、気持ちいい——っ！」

威厳たつぷりであった神話の魔王が乳首だけでイッてしまった。それと確認した星太は素早く立ち上がるや、王座の左右の肘掛けに足をかけて、大股開きになる。

「っ!？」

いきり立つ逸物が、惚けているレーバティンの鼻先に突き出された。

「もう我慢できません。お口でしてください」

「なぜ予がそのようなことを……」

動揺したレーバティンの頬に朱が走る。

怒りではない。欲情の色だ。

もう逸物を膣内に啞え込みたかったのだろう。しかし、女帝としてのプライドでそれを言うことはできない。

「お願いしますよ」

先走りの液の垂れる亀頭部を、レーバテインの右頬に押し付けた。そこから左に移動させて、唇の上をなぞり、左頬に押し付ける。

「本当に命知らずな小僧だな。しかし、近くで見ると一段と見事なちんちんだ。これならば最深部まで届き、予を満足させられるやもしれぬ」

レーバテインは、両手で星太の尻臀を両手で抱えこむと、大きく口唇を開き、亀頭部をパクリと啜えた。

（よし、釣れた♪）

本来、敵の女、まして、レーバテインのような女の口に無理やり逸物を入れるなど、嘔み切ってみせろ、と言うようなもので、危険極まりないが、星太はまったく不安に感じていなかった。

「ん、うん、うむ……」

鼻息荒くしたレーバテインは、頬をすぼめて逸物をすする。

（うわ、すげえ吸引。でも、この舌使い。まったく経験がないってわけではないか。そりゃ、そうだよな。千年も生きているという話だしな。でも、この飢えた感じ。相当ご無沙汰だったんだらうな）

技量という意味なら、マリイのほうがあつた。しかし、小手先の技量を吹っ飛ばす情熱を感じさせるフェラチオであつた。

魔王の力で持久力のアップしていた星太の逸物であつたが、たちまちのうちに追い詰め

られてしまう。

「くっ、もう限界……でる」

千年の時を生きる女魔神のテクニクに屈した星太は、その口内に向かって、思いつきり欲望を放った。

ドビユ！ ドビユツ！ ドビユビユビユビユビユ!!!

「うむう!？」

喉奥を突かれたレーバティンは、驚き目を見開いたが、逸物を吐き出すことはなかった。それどころか、ますます強く肉棒をすすする。

「うおおおおお!!!」

精液をすべて吸い取られるような恐怖を感じて、星太は雄叫びをあげてしまった。

そして、逸物が小さくなったところで、ようやく解放してもらえた。

「ふう〜、気持ちよかった。どうでしたか、ぼくのおちんちんの味は？」

星太が右の耳元で甘えたように質問すると、惚けた顔のレーバティンは口角から溢れた白濁液を軽く舌で舐めてから、一言答えた。

「……美味♪」

「それはよかった」

星太は王座の肘掛けから飛び降りると、レーバティンの黄金造りのパンツに手を伸ばした。

「……」

レーバティンは無言のまま、座席から尻を軽く上げて協力してくれた。

黄金のパンツがなくなると、ぶわつと溢れかえるように赤い剛毛が飛び出した。よくまあ、あの極小のパンツからハミ毛もせずに押し込んでおけたものだ、と感心してしまう。

(こっちの世界に来てから、いろんな女性とやったけど、こんな剛毛な女性は初めてだ。陰毛が豊かな女は、性欲も強いつて言うもんな。これは楽しみ♪)

星太が促すと、レーバティンは豪快に膝を開いた。

「……まったく貴様は本当に底抜けのスケベだな」

「魅力的な女性が好きなのですよ」

レーバティンの姿勢は、星太たちがここ謁見の間に入ってきたときとまったく同じとなつた。ただ、パンツがなくなつただけである。

星太は椅子の前に正座をすると、赤い陰毛をかき分けた。

そして、あらわとなつた肉割れの左右に親指をかけると、ぐいっと割り開く。

(うわ、さすが魔界の女帝さま、オマ○コもゴージャスだわ)

小陰唇がまるで鶏の鶏冠のようである。陰核は大粒であり、さながら鬼の一角のように飛び出している。膣穴はパクパクと物欲しそうに開閉を繰り返し、そのたびに熱い牝蜜を吐き出していた。

(これは美味そう♪)

舌なめずりをした星太は、女帝の陰唇へと顔を埋める。

それをレーバティンは止めなかった。そこで星太の舌は、会陰部から船底を通り、膣穴、尿道口、そして、陰核まで舐めあげた。

「ああん♪」

椅子に反り返ったレーバティンは、気持ちよさそうに喘ぐ。

いかに無敵の女帝といえども、クンニリングスをされれば理性が溶けるということだろう。

それを見て取った星太は、女の肉壁を舌尖でなぞる。尿道口を舐めほじり、陰核をしゃぶり倒し、膣穴に舌を入れて掻き混ぜる。そして、膣穴に向かって思いっきり息を吹き込んでやった。

「はあああああああ!!!」

ビクビクビク

長時間に渡って陰唇を玩具にされたレーバティンは、トロットロになってしまった。そして、我慢の限界に達したのだろう。口を開く。

「はあ、はあ、うむ、はあ、小僧、いつまでそこを舐めているつもりだ」

「ぼくは女帝さまのおマ○コを舐めていられるだけで幸せですよ」

「くっ」

星太のすつとぼけた答えに、レーバティンは眉を寄せた。

成熟した女体の願望は、もちろん、わかっている。彼女におねだりの言葉を吐かせることによって、主従関係を逆転させるのだ。

(女はおちんちんを我慢できない。そう二次元ドリーム文庫に書いてあった)  
聖書の教えに従って、星太はひたすら舌を回転させた。

「はああん、お、おちんちんを入れろ。は、早く」

ついにレーバティンは、おねだりの言葉を吐いた。

しかし、陰唇からいったん口を離れた星太は、陰核を指で摘みながら冷たく応じる。

「そんな言い方じゃ、入れませんよ」

「なに」

星太の尊大な言い分に、レーバティンは目を剥く。

ニヤリと人の悪い笑みを浮かべた星太は、陰核を軽く指で弾いてやった。

「はあん」

「もつとかわいくおねだりしてください」

「はあああ、こ、小僧……!? はあああん、早くちんちん……」

もし処女であったなら、逸物に貫かれる気持ちよさなど知らない。しかし、経験があるだけに我慢が利かないのだろう。

男根に貫かれたくてヒクヒクしている女体を前に、星太は背後に向かって声をかける。

「おまえら、いつまで休んでいるつもりだ。こっちに來て手伝え。炎の女帝さまにおねだ

りの仕方を教えて差し上げろ」

「了解ですわ」

星太の指示を受けて、マリイが立ち上がった。それに続いてダークエルフ、錬金術師、サキュバス、獣人、ドワーフ、雪女、人魚、吸血鬼、剣鬼といった面々が、喜々として階段を上ってきた。

「ひい、ちよ、ちよつと、なにを……や、やめろ」

事態を悟ったレーバティンは抵抗しようとしたが、もはや足腰に力が入る状態ではない。

「では、いったん任せた」

「任されましたわ」

マリイの合図に従って総勢百名からなる女たちが順番に、レーバティンの体にとりついた。

大柄な女の体躯の左右の手の指、足の指、肩、乳房、乳首、陰核、臍、脇腹、腋の下、耳、内腿、頭髮などなど、およそ女の性感帯とおぼしき箇所が、すべて同性によって舐め回されたのだ。それも入れ替わり立ち替わり様々な女たちによって休みなく、である。

「ひい、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、耳はダメ、耳に息を吹きかけないで！ ああ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい」

先ほど、まさに鬼神の如き強さを見せて圧倒した女たちに、逆に舐め回されてレーバティンは理性を失っている。

(なかなか壮観だなあ)

星太が見学していると、不意に女たちがレーバティンの体から離れた。

レーバティンは座席に両肘をつきうつ伏せとなり、大きな尻を星太に差し出してきた。

「お願い、入れておちんぼ入れて、もう我慢できないの」

切なげに尻をくねらせておねだりするレーバティンの痴態には、威厳の欠片もない。

その耳元でマリイが囁く。

「そんなのではダメですわ。魔王さまのおちんぼをいただくためのお言葉は、先程教えたでしょ」

「あ、あれを言わねばならんのか、本当に……。くっ、わかった。予こと炎の女帝レーバティンは、魔王保坂星太のおちんぼ奴隷になることをここに聖約します。ですから、おちんぼさまを入れてください、あん♪」

その被虐的な宣誓の言葉に酔ってしまったのだろう。剥きだしの陰唇から、とぶつと蜜が大量に溢れた。

「そこまで言われては仕方ないな」

星太は大きく引き締まった褐色の尻を両手で抱きしめると、いきり立つ逸物を押し込んだ。  
だ。

(うわ、さすがに締まる。しかも、入口と中ほどと奥の三ヶ所でキュッキュッキュツと締まる三段締めオマ○コだ)



その縮まりの良さに星太は感動したが、それ以上に逸物に貫かれたレーバティンが悦んでくれた。

「はあああ、ちゅ、ちゅごい。と、届く。予の子宮口におちんぼさまが届いておる」  
たしかにレーバティンの言う通り、星太の逸物の切っ先は最深部を捉えることに成功している。

体が大きすぎるがゆえに、いままで出会った男の逸物は子宮口にまで届かなかった、ということだろうか。

自分の逸物が大きいと実感できるのは、悪い気分ではない。さらに感じさせてやりたいと欲した星太は、レーバティンの右足を抱えてリズミカルに腰を叩き込む。

これもまた二次元ドリーム文庫で仕入れたテクニクである。女は左右を不均衡にしたほうが、より快樂が高まる。

パンッ！ パンッ！ パンッ！

女の尻と男の腰がぶつかり合う音が謁見の間に鳴り響く。

「あ、だめ、予、予は、久しぶりだから……いや、このおちんぼすぎい、すぎすぎるのだ。予はこのおちんぼさまに会いたかった。会いたかったのおくもうだめえええ！ ひい、ひい、ひい」

我を忘れ、涎を噴きながら嬌声を張り上げているレーバティンの姿に、周りの女たちは苦笑する。

「ああ、イキっぱなしの状態に入りましたわね」

「ああ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいいの、このおちんちん気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい、いい、いい、いい、いい」

久しぶりの肉棒を受け入れたレーバティンは、発狂したように快楽をむさぼっている。ここまで喜んでもらえると星太としてもサービスタクになる。

王座に座った星太は、レーバティンを膝にのせて両足を抱えてM字開脚にすると、両手で乳房を鷲掴みにし豪快に揉みしだきながら、下からガンガンと突き上げてやった。

「う、うそ、こんな、あああゝ すごすぎるううう」

大柄な体躯の自分が、まるで玩具のように弄ばれるなどレーバティンは考えたこともなかったようだ。

もちろん、魔王の力があればこそその荒業である。

「も、もう、らめ、らめ、らめ、これ以上、イカされたら、オカシクなる。いや、もうオカシクなっている。もう予は、このおちんちんのない生活は考えられない。オチンポ奴隷、最高」

先輩のオチンポ奴隷たちに、男女の結合部をさらしながらレーバティンは泣いていた。同時に星太も限界に達している。

(こんなに締まるオマ○コ初めてだ。もう、搾り取られてしまう)

両手でレーバティンの太腿を抱えあげたまま、逸物を最深部に押し込む。そして、子宮



## 第五章 光の勇者たち



「あれ、やるの？ 魔王さまも好きね」

「な、なにをするつもりだ……」

さすがのエターナルも動揺の表情を浮かべる。

「くっくっくっ、すぐにわかりますよ」

※

ギロチン台から外されたエターナルは、今度は風呂に入れられた。

無駄に広い風呂だ。おそらく普段、外道な魔王とその手下である痴女たちが一緒に入って楽しんでいるのだろう。

湯は清流のように美しく、温度も適温だ。

失禁してしまったあとであるし、エターナルは素直にありがたかった。しかし、同時に不気味でもある。

「これはもう剥がしていいのだな」

両手の自由を取り戻したこともあり、エターナルは陰唇を左右に開きくばあ状態に留めていた透明なセロハンテープを剥がす。

それを星太が黙認したことに、エターナルはさらなる不安を感じる。

つまり、これ以上の恥辱が待っているということだろう。しかし、それと察しながらも、内心の不安を押し殺したエターナルは悠然とお湯を楽しんだ。

「ふん、どうやら、貴様の自慢のおちんちんとやらでも、わたしを屈服させることはでき

なかつたようだな」

演技だとしても、たいした胆力と讃えるべきだろう。星太はますます惚れてしまった。しばらくすると、エターナルの肌になにか触れる。

「な、魚？ いや、ウナギ……？」

戸惑っているうちにウナギの数が増えて、四方八方からエターナルの肌を突っついてくる。

「ちょ、ちよつと、なんなの、これ？ あん、ウソでしょ？」

ウナギの口が、エターナルの乳首に吸い付いた。……だけではない。陰核に吸い付いた。「ひいっ」

悲鳴をあげたエターナルは、慌てて乳首や陰核にとりついたウナギを引き剥がした。

しかし、次の瞬間には、不埒なウナギはエターナルの膣穴に頭を入れてこようとす。慌ててそれを押しとどめると背後から、肛門にも入ってきた。

「くっ、今度はこれか。次から次へと下らぬことを」

ウナギ風呂などというとんでもないものに入れられてしまったエターナルは、必死に逃れようとす。思うように体を動かせない。

膣に入ってしまったウナギを両手で掴み引き抜くが、抜いた直後からすぐに新しいウナギが入ってくる。

「おーほほほ、これはすごいですわね。こんな責めを思いつくなんて、錬金術師、お手柄

よ」

興が乗ったマリイは、実に楽しそうに高笑いをした。

上司に褒められた女錬金術師は、陰気に解説する。

「もちろん、ウナギはわたしの錬金術で作り出した特別製よ。別に体に害を与えることはないわ。ただし、女を永遠に感じさせ続けるだけ」

「ああ、ダメ……こんな」

ヌルヌルとした生臭い魚が体に這う嫌悪感。しかし、そのヌルヌルが異様に気持ちよかった。

女のもっとも大事な部分に魚が入るなど、耐えがたい精神的な苦痛だ。しかし、肉体的に気持ちいいものは仕方がない。

「はあ〜」

快感のあまり手足から力が抜けて、もはやウナギを引き抜く力を失ったエターナルは、快感と嫌悪感の狭間で悶絶する。

そんな痴態を存分に堪能した星太は、したり顔で助け舟を出してやる。

「俺の女になる、と誓うなら、すぐにでも助けてやるよ」

「だ、だれが……はん」

強気に答えたエターナルであったが、左右の乳首を別々のウナギに吸われ、陰核を吸われ、膣穴と肛門にそれぞれ頭からウナギに入られて理性を維持できなかった。



「あつ、ダメ、そんな奥、子宮を突かないで」

どうもエターナルは子宮口が極めて敏感な性感帯らしい。星太の逸物に突かれていたときも、喜んでいた。

その弱点をウナギの頭で突っつかれたエターナルは、目を剥いて震える。  
ビクビクビク

「あはっ、すごい、ウナギでイッてますわ」

マリイはよほど壺に嵌まったのか、手を叩いて爆笑する。

衆人環視の中でウナギに全身をまさぐられたエターナルはたしかに絶頂してしまっていた。それも一度ではない。二度三度と連続で、だ。

「あ、そんな、連続で、休みなく……ひいいい」

錬金術で改良されたウナギたちは、エターナルが絶頂しようがしまいが関係なく、その体を震わせ続けていた。

「また、また、イっちゃう。もう、らめ、許して」

いわば全身にバイブをつけられているようなものだ。その非人間的な責めにさらされて、青息吐息で悶絶しているエターナルに、再び錬金術師が得意げに説明する。

「うふふ、お楽しみのところ悪いけど、いくら気持ちよくとも所詮はウナギ。決して射精はしないわ」

「なっ!!」

それに思い至って、ウナギに弄ばれていたエターナルは凝然と目を剥く。

その表情にマリイは、ニヤニヤと実に人が悪そうに嗤う。

「あらあら、ずいぶんと物欲しそうな顔をする。どうやら、なんだかんだ言っているも、膣内射精される気持ちよさはしつかり覚えていたのね」

「それはそうじゃろ。膣内射精の気持ちよさを忘れられる女がいるはずがない」  
傍らに立つていたレーバティンは、腕組みをしながら首肯する。

「それにあの娘、先程ダーリンに膣内射精をしてもらう直前に、お預けをくらったからの。あれは切なかるう」

「たしかに気持ちはわかりますわね。射精のないセックスなんて、愛のないセックスと同じ、実に味気ないものですわ」

好き勝手な論評をしているマリイたちを他所に、ウナギの群れに全身を弄ばれながら絶頂を繰り返していたエターナルは、我を忘れて叫んでしまった。

「そ、そんな射精しないだなんて……オマ○コの中でビュービュー熱い液体を吐き出してくれないだなんて、そんなの……生殺しじゃない！」

「欲しかったら、俺の女になると聖約するんだな」

星太に促されたエターナルはついに叫んでしまった。

「おちんぼ、ください。わたしのオマ○コの中に硬いおちんぼを、魔王さまのおちんぼさまを入れて、熱いザーメンを子宮にビュービューかけてえ〜〜♪」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**